

はんにゃしんぎょう
『般若心経』について (八)

野口圭也 (種智院大学客員教授)

Ⅲ. 『般若心経』の内容について (5)

9. 「空」と「不」と「無」

ここまで見てきた範囲では、五蘊から四聖諦にまで至る様々な物や事項が、「空」であるとか、「不」だとか、「無」であるとか言われてきました。これらの言葉は似ているけれども違いがあります。ここで「空」と「不」と「無」の違いを考えてみましょう。

まず「空」とは、あるものに「実体が無い」ことを意味します。「実体が無い」ものは、ずっとそのものであり続けることはありませんが、今現在は「あるもの」として、現に認識され得ます。それは真実の存在ではないとしても、存在が全くもって何も無し^の皆無であるわけではありません。今のところは「あるもの」として私たちに認識されているのもまた真実なのです。真実ではないが、今現在認識されているようなあり方で現象的・仮構的に存在している。それが「空」であるものの存在のあり方です。

「不」は否定辞の *na* と、否定を表す接頭辞 *a(an)-* の両方を用いて「不生不滅、不垢不淨、不増不減」と言われています。否定の接頭辞 *a-* は、母音の前で *an-* となります (*an-utpannā*)。「無」は、サンスクリット語では否定辞の *na* によって表されます。

否定文には、「～しない」「～でない」という、動作や状態を否定する場合と、「～が無い」のように、名詞で表されるものの存在を否定する場合とがあります。「不」はこのうち前者の方、すなわち「～しない」「～でない」に相当すると考えてよいでしょう。実体がないということが特質であるすべての存在は、「生じない、滅しない、汚れていない、汚れを離れているのではない、欠けていない、満ちていない」というように、ある動作が真に行われたり、真にある状態になっているのではない、ということ述べています。

一方「無」の方は、存在が無いことを意味しています。五蘊・十二処・十八界という日常経験の世界のもろもろの存在物は、実体が無いという状態においては、真実に存在していません。実在していないのです。これを「無」という語によって表しました。しかし同様に、十二支縁起やその滅盡、さらには四聖諦や真理を知ること、涅槃の獲得さえもまた、「空」の立場から見たときには実在していない、と『般若心経』は説いています。

実体がない＝空である、という立場からすると、五蘊・十二処・十八界が真実でない、ということは話の筋道として理解できます。しかし仏教徒が追求すべき真理や涅槃までもが実在しない、とはどういうことでしょうか。

世間的な存在は空だが、仏教の真理は実在である、とする立場を『般若心経』は斥けます。これは『般若心経』だけでなく、すべての般若經典の思想です。「すべてが空である」と言うとき、そこに例外は認められません。ブッダでさえ空なのです。涅槃や真理は確かに仏教徒の到達目標です。しかしそれは、確固たる恒常不変の存在ではない。そこに到達した時には、その場所では消えてしまっている水の上の月の映像のようなものです。

私たちが今いる迷いの世界を此岸 (こちら側の岸)、悟りの世界を向こう側の岸、つまり彼岸^{ひがん}とすることがあります。しかしそれは、幅何メートルの川の向こう側の船着き場、というような固定された場所ではありません。渡って向こう岸に着いたと思ったら、向こうとこちらの区別が無くなってしまふような場所なのです。しかも『般若心経』の立場では、向こう岸を目指してひたすら渡っていたのでは、決して向こう岸に到達できません。

大乘仏教では、悟りや涅槃を到達すべき固定的な目標として設定し、それに強く執着することを厳しく戒めます。それは悟りや涅槃を一つの固定的な実体として理解するのを斥けることでありますし、また悟りという目標に捕らわれ、そこに到達すること自体を目標とするような修行のあり方を否定することでもあります。

「すべては空である」。ここには例外はありません。衆生もブッダも、人の身心も仏教の教理も、般若波羅蜜多でさえも、すべてみな「空」なのです。だからこそ、すべては絶対的に清浄であり、衆生がブッダになることも可能となる、それが般若經典の根本的な立場です。

10. 「以無所得故…究竟涅槃」について

ここは少し不思議な文です。前の文で「得」とは「涅槃に到達すること」だと言いました。『般若心経』の立場は、仏教徒の目的であったはずの「涅槃への到達」さえも否定します。ところが続くこの文では、「涅槃に到達することが無いから、般若波羅蜜多に依拠して、心に覆いが無く、覆いが無いから怖れることなく、ひっくり返った考えを超越して、涅槃に安住する（究竟涅槃）」と述べているのです。「涅槃に到達しないから、涅槃に安住する」？このような言い方を「逆説」と言います。「無所得故」の句を欠いたサンスクリット写本もあります。この句が無い方が論理的につながり易いのは確かです。しかし『般若心経』は、論理的整合性を旨とする「論書」ではありません。観自在菩薩が「智慧の完成」を深く行じた時の体験を叙述した「經典」であることを念頭に置く必要があります。

この逆説は『般若心経』の構成上、重要な切り替えポイントになっています。この前の部分では、五蘊は空である、諸法は不生不滅である、五蘊も十二処も十八界も無い、十二支縁起も四聖諦も無い、真理を知ることも涅槃への到達も無い、と説いてきたのが、ここで一挙に切り替わります。この後は、「涅槃を得ることはない、ゆえに」と言って、涅槃に安住し、この上無く正しく完全な悟りを悟る、と述べているのです。否定、否定で説いていたのが、ここから一転して肯定の意味を持つ文章へと展開してゆきます。

大乘仏教の立場では、涅槃という個人の目的地点への到達よりも、そこに至るまでのプロセスを重視します。そのプロセスとは、慈悲に基づく他者へのはたらきかけ＝方便と呼ばれます。自らの修行の完成よりも他者の利益を優先する行い、すなわち利他行とも言います。大乘仏教の要素を強く保持する密教經典である『大日経』には、「方便究竟」という句があります。方便こそが究極の完成である、というのです。また真言宗において最も重要な經典である『理趣経』にも、「菩薩勝慧者。乃至盡生死。恒作衆生利。而不趣涅槃（菩薩という勝れた智慧のある者は、生死輪廻が盡きるまで、恒に人々の利益になることを行い、涅槃の境地に自分だけ入ってしまうようなことはしない）」と説かれています。

涅槃を到達目標とした時には、到達主体（自分自身）と到達対象（涅槃）という二元性に分離してしまいます。しかしそもそも智慧の完成とは、二元性を超越した心のはたらきです。涅槃を到達目標として掲げている限りは、智慧の完成とは隔たってしまうのです。

「究極の目標である涅槃への到達が、何かしらの実体として存在しているのではない」ということを正しく理解して、涅槃を絶対視するのではなく、「涅槃への到達は無い」あるいは「涅槃よりも大切な事がある」と涅槃を相対化することによって初めて、智慧の完成に依拠して、涅槃に安住することが可能となってくるのだ、と述べているわけです。

